

クリスマスクラッカー

Christmas Crackers
クリスマスパーティでの
マストアイテムといえばこれ!

日本のクラッカーといえば、だいたい円錐形をしています。イギリスのクリスマスクラッカーは、円筒形の包みを、キャンディーのように両側で結んだ形をしています。

12月になると、レストランで食事をしているグループが、赤ら顔をして、皆それぞれに紙でできた王冠のような帽子をかぶっている、という光景を目にすることが多くなりますが、この紙製の帽子は、クラッカーの中に必ず入っているもの。映画『アバウト・ア・ボーイ』の中のクリスマスのシーンで、主人公役のヒュー・グラントも照れながらかぶっていましたが、poshな人も、日頃は冷静沈着な人も、大人も子どもも、ク

リスマスパーティではこの帽子をかぶるのがお約束です。

ちなみに、クラッカーは、テーブルの隣同士に座った2人が、それぞれのクラッカーの端を握って(この際、自分の前で手を交差させてクラッカーを引っ張り合う、という説もあります)お互いに引き合うと、中から紙の帽子とおもちゃなどのギフト、小さな紙切れに書かれたさまざまなジョークなどが飛び出す、という仕掛け。人々は、クリスマスディナーが運ばれてくるまでの間、そのSillyなジョークやクイズを笑ったり、クラッカーの中に入っていたおもちゃをいじって遊ぶのです。

この、イギリスのクリスマスになくはない存在ともいえるクリスマスクラッカーは、1847年、菓子職人であったTom Smithによって発明されました。彼が1840年にパリを訪れたときに発見した、両端をひねった紙に包まれた「ボンボン」という菓子が原形となり、それに暖炉の焚き火の弾ける音からインスピレーションを得て、クラッカーがつくり出されたといわれています。

今年は何にしましょうか?
クリスマスクラッカー比べ

街のあちこちで売られているクリスマスクラッカー。UKジャックでは、主要なスーパーで5ポンド前後で販売されているリーズナブルなタイプのものを選んで比較してみました。



Sainsbury's 12 Crackers
12個入り、4.5ポンド

ゴールドと赤のつやのある紙に「Merry Christmas」の文字と柵の絵柄。紙が柔らかいため、うまくひねらないとクラッカーがきちんとはじけない可能性があるので注意が必要。クラッカー毎に帽子の色がそれぞれ違うので、カラフルで楽しい。プラスチック製のギフトも同じくカラフルな色使い。クイズの紙切れは、かわいいイラスト付きでなごむ。



Waitrose 12 Crackers
12個入り、6ポンド

ゴールドと赤の2色使い(各6本づつ)に「Merry Christmas」と書かれた包みは、しっかりした厚紙が使われていて、見た目のボリューム感あり。ただし、箱の中身はプラスチックのミニ玩具で、かなりのチープ度。小さな紙に書かれたさまざまな、お約束通りの「超脱力系」。どちらかといえば高級店というイメージの Waitrose だけに、そのギャップが面白いといえる!



Asda 6 Luxury Mini Crackers
6個入り、4.27ポンド

プレーンな銀と、斜めにラインの入った銀という微妙に違う2種のシルバーのパッケージ。入っている帽子は厚めの紙が使われていて、かなり丈夫(色は銀)。ギフトもメジャーやステッパーなど、デスクで実際に使えそうなものが多く。2種類の JOKE, TRIVIA, CHARADE が書かれた紙は今回比較したクラッカー中、1番大きくて、イラストつき。



Marks & Spencer 6 Crackers
6個入り、5ポンド

赤と白がそれぞれ3本づつで、赤には雪だるま、白にはサンタクロースのキュートなイラストつき。クラッカーが入っている箱自体もラブリイで、見た目の可愛らしさから、子どもたちのパーティにも喜ばれそう。シールやパズルなど、中のギフトのいくつかは、パッケージと同じイラストが使われていて、こちらも可愛らしい。入っている紙の帽子はすべて赤色。



Tesco Christmas 6 silver mini luxury crackers
6個入り、4.24ポンド

白とシャイニーなシルバーの2色で、こぶりなクラッカーは、大人同士のパーティによさそう。ギフトも色を白とシルバーに統一して、爪切りや鍵など「使えそうなもの」がチョイスされている。Mottoと呼ばれる紙には、1枚に JOKE, TRIVIA, CHARADE の3種類が書かれているのでお得感あり(?)。帽子はすべて銀色。



クリスマススイーツ

Cake, Mince Pies...
クリスマススイーツには
ドライフルーツがたっぷり

ミンスパイは、16世紀頃から、クリスマスを祝うものの定番のひとつに数えられていました。当時は、刻んだ肉にドライフルーツを混ぜたものが材料として使われ、その形は現在のように丸ではなく、楕円やゆりかごを模したような形をしていたとのこと。



また、イギリスの伝統的なクリスマスケーキは、日本の、スポンジケーキに生クリームたっぷり、といったものとは違って、どっしりとしたフルーツケーキを、マジパンとホワイトアイシングでコーティングしたものです。側面にはリボン巻いてデコレーションをし、柵の葉と実などをケーキの上に飾ります。このタイプのケーキは日持ちをするという点もあり、また、一度にたくさん食べられるものではないということもあって、25日以降も、食べきれなかった分がたくさん残っている家庭も多いよう。家族が飽きて食べ残したケーキを、「捨てるのはもったいない」とお母さんがクリスマスの後少しづつ食べているのは、日本のお正月に食べ飽きて残ったお節料理を、お母さんが少しづつ食べ片付けるのに似ているかもしれませんね。

クリスマスプディング

Christmas Pudding
日本人にはちょっと手強い味?
こってり感のあるデザート

クリスマスプディングは、この時期、スーパーなどでもよく売られている、お椀をひっくり返したような形をしたお菓子。昔は、ドライプラムやプレーンが使われ、その名も「プラムプディング」と呼ばれていたそう。当時はこのプディングを作る際、家族の全員が、それぞれに秘密の願いを込めつつ交代にかき混ぜ、コインをひとつプディングの中に入れて、食べたときにそれが当たった人は、幸運がやってくるかと信じられていたといえます。たくさんの材料やスパイス、蒸し時間を必要とするため、最近ではスーパーなどで購入して、食べる前に電子レンジで温める家庭も増えていますが、部屋の電気を消して、ブランデーをかけて火を灯し、ちょっとロマンチックな雰囲気を楽しむプディングは、



www.britainonview.com

依然としてイギリスのクリスマスになくはない存在です(ただし、子どもたちにはあまり人気ではないようですが)。多くのイギリス人は、ブランデークリームや、カスタードクリーム、ダブルクリームといった、クリーム類と一緒に味わいます。

クリスマスの終わり

Twelfth Day
1月6日には
クリスマス飾りを全てしまっ

クリスマスから12日(Twelve Days of Christmas)後の1月6日(Twelfth Day)には、飾っていたクリスマスカードやツリーなど、すべてのクリスマスグッズが街中から取り除かれます。イギリスでは、この日を過ぎてもクリスマスの飾りがそのまま残っているのは、縁起の悪いことだとされています。皆さんも、イギリス流のクリスマスを楽しんだ後、1月6日には、カードやツリーをしまうようにしてくださいね(逆に言えば、日本とは違って、それまではクリスマスが続いている、ということでもあります)。

ボクシング・デー

Boxing Day
スポーツのボクシングには関係ありません

クリスマスの翌日26日のことで、イギリスでは、クリスマスと同様国民の休日となっています。「ボクシング・デー」の名は、この日に、教会の寄付金箱(Alms Boxes)が開けられ、その中身が教区の貧しい人々に配られたことに由来するといえます。また、クリスマスの日でも、主人のために働かなければならなかった召し使いたちに、休暇が与えられ、家族の元に帰ることを許された日でもあります。



この日は、バブル・アンド・スクイーク(Bubble and squeak)と呼ばれる料理を食べるのが一般的。これは、クリスマスディナーの付け合わせの野菜で残ったものを細かく刻んでフライパンで焼いたもの。古くから伝わるこのレシピは、ローストディナーの残りものを刻んで料理するもので、多くの家庭では、クリスマスディナーの翌日はこれを食べることが多いようです。

クリスマスの過ごし方

Christmas Pastimes
飲み過ぎのお父さんは
ソファで居眠り!?

午後3時からのエリザベス女王のスピーチを聞かされた、というわけではなく、多くの家庭では、クリスマスディナーでおなかがいっぱいになった後は、ソファに座ってテレビを見る、というのが一般的。または、一家揃ってゲームをする、という過ごし方もまだまだ健在。その時のゲームは「Scrabble」や「Monopoly」といった、定番ものが人気ようです。

